フランス・カナダを中心とした観光研究とコピー版ルルド巡礼について

研究員　羽生 敦子

1. はじめに

私は、観光研究所の研究員としてフランスとカナダのケベック州を対象に観光研究を続けている。本報告では、2023年4月から12月までに成果として発表した研究を対象に報告を行う。

【報告の順番】

(1) フランスを対象とした研究

1) フランス近代観光史について：海浜リゾート

2) コロナによるフランスの働き方の変化について

(2) カナダ東部の観光研究

1) ケベック州の観光について、「誰が見るべきものを創ってきたのか」との視点から観光資源についての考察

2) プリンス・エドワード島のコンテンツ・ツーリズムについて

(3) ルルド研究の継続（科研費基盤研究C「複合現実体験としての聖地巡礼：ルルドをはじめとする19世紀西欧における虚実の複合」）：日本のコピー版ルルド巡礼に関する論文を執筆中である。

(4) おわりに

2. 報告

(1) フランスを対象とした研究

1) フランス近代観光史について：海浜リゾート

フランスでは、北部海岸（Dieppeディエップ）からリゾート史が始まった。海水療法（冷水療法）というイギリスの風習がドーヴァー海峡を挟んだ対面の海岸に反映されたものである。19世紀中葉、ナポレオン三世による産業奨励によって、首都パリの改造という歴史的な大工事があったのは周知のことであろう。皇帝はそれ以外にも富裕層のためのリゾート地の形成にも関心を寄せていた。鉄道開設事業に関しても民間企業に投資させながらインフラを設備させていく。北部海岸では、鉄道の敷設とともにTrouville-Deauville（トゥルーヴィル・ドーヴィル）が整備、開発され「海辺のパリ」と言われるほど人気となった。海浜リゾートは「シック」な場所としてのステータスが確立されていく。

フランス人といえば「バカンス好き」を想起させるほどであるが、大衆化が始まったのは1936年以降である。レオン・ブルム内閣下、フランス人民戦線の要望である「すべての労働者たちに有給休暇を」が認められ、2週間のバカンスが全労働者に与えられたのだ。労働者は初めてバカンスを知り、居住地以外の場所で楽しむことを知ったのである。海辺のリゾートにも変化が現れる。これまで憧れの場所であったTrouville-Deauvilleの属性が変容する。Trouvilleは大衆化という選択を選び、今日ではファミリー層の海浜リゾート地になっている。一方で、Deauvilleは「シック」というイメージを保持している。三万人弱の人口に関わらずそこには、フランスの高級ブランド店の数々があり、砂浜には400本のパラソル、ウッドデッキ遊歩道が整備され、ノルマンディ様式のホテルや立ち並ぶヴィラが19世紀当時のイメージを再現する。冬季の療養地（とりわけ結核患者）であったニースもまたイギリス人によってそのリゾート史が開始した場所である。しかし、20世紀になると夏期のリゾート地として人気を集める。とりわけ3Sと要望を満たす地中海沿岸は相変わらず人気である。

2) コロナによるフランスの働き方の変化について

「フランス人と言えばバカンス」というような言説がある。フランス人にとって有給休暇（バカンス）は勝ち取った権利（1936年）であり、長期休暇は当然のことである。そして、バカンス中、仕事に携わらないのは当然である。バカンスと仕事は二項対立的な関係である。ところが、2020年のコロナの蔓延により多くの企業でリモートワークが義務化され、これまでの二項対立が解体されそうな状況となった。今回、フランスのタイヤメーカーミシュランの本社（クレルモン＝フェ

ラン）で働く友人に、現在の状況をSNSを通しインタビュー調査を行った（2月26日、4月3日、5月26日）。2023年現在、週1回あるいは週2回のリモートワークが推奨されているとのことが分かった（クレディ・アグリコル銀行も同様とのことであった）。特に小さい子供のいる家庭では有効な働き方だと支持されている。また、リモートワークと週末の休みを連続させて、家族と過ごす時間もできることも利点となっているようだ。このように、コロナ後も引き続きリモートワークは支持されているものの、私の友人の私見であるが、「仲間と一緒に仕事をすることが楽しい」と考えるフランス人も多いとのことから、その頻度はこれからも変わらないのではないかと考える。ただし、ミシュラン本社は地方にあること、つまり豊かな自然が日常にあることを考慮すれば、一般化できるものではないだろう。

以上1）に関しては「フランスの北部海岸リゾートの変遷：優雅なバカンスから当然のバカンスへ」として、2023年5月発行のリゾートビジネス研究会（株式会社日本経済社）の「リゾート白書2022」。2）については、同年6月に、前述研究会が主催する第三回研究会の発表報告、「フランス近代観光嚆矢：海浜保養地の移り変わり」をもとに編成し直したものである。

［主要参考文献］

コルバン・アラン（2010）『レジャーの誕生』渡辺響子（和訳），東京，藤原書店,上下

羽生敦子（2012）『フランス北部海岸コート・フルーリのイメージ形成について，Deauville，Trouville，Cabourgを事例に』，日本観光研究学会全国大会学術論文集（27）177-180,日本観光研究学会

山田登代子（1998）『リゾート世紀末：水と記憶の旅』，東京，筑摩書房，350p

（2）カナダ東部の観光研究

1）ケベック州の観光について「誰が見るべきものを創ってきたのか」

ケベック州は、セントローレンス川に沿ってモントリオール、州都のケベック・シティが位置するカナダ北東部の州である。カナダ唯一のフランス語圏でもある。日本ではメープルシロップと紅葉の美しさだけが、観光資源として認識されている場所であるが、ヨーロッパからあるいは隣国のアメリカ合衆国からはなにを求めて人々はケベックを旅したのか、『オールドケベックからベル・プロヴァンスへ』、ディケンズ、イザベラ・バードのテキスト等から考察を行った。ケベックは1543年のフランス人ジャック・カルチエの「発見」から、フランスの植民地ヌーヴェル・フランスとして統治されていたが、1763年、フレンチ・インディアン戦争（カナダにおける英仏戦争）の敗北により、フランスは北米における多くの領土を失った。それ以降、フランスからの旅行は禁止される[(1)]。19世紀中葉になり、イギリス人（あるいはアメリカ人）がケベックに「観光」を目的として訪れるようになる。支配階級から被支配階級へと転化したフランス系のカナダ人[(2)]の生活を見ることもまた「楽しみ」だったようだ。当時は先住民族もまた「見るべき」ものとされ、二つのエスニックツーリズムを確認することができる。一方、現在、ケベック州の大きな観光資源は「紅葉」である。しかし、いつから「見るべきもの」として人気となったのだろうか。ケベックを旅したディケンズやバードの文章から「紅葉」に対する言及はほとんど見られない。実は、紅葉を観光業に導入したのは1970年代の日本のツアー会社であった。とりわけ日本においては、ケベック＝紅葉＝秋の観光の定型が現在でも続く。次に、2023年現在までその人気が続く2016年の韓国ドラマ『トッケビ』効果を事例とし、コンテンツ・ツーリズムがもたらした新しい観光資源についての考察を行った。最後に、ケベック州政府、およびカナダ連邦政府が推奨する「先住民観光」の意義について紹介した。

［補注］

(1) つまりフランス人旅行者によるテキスト（旅行記など）が存在しない。最初のツーリストはジョルジュサンドの息子だったのでは、と推測されている（Neatby:2018）。

(2) アビタン（habitant）と呼ばれていた。

［主要参考文献］

Neatby Nicole（2018）*From OLD QUEBC to LA BELLE PROVENCE1920-1967*
McGill-Queen's University Press. Montréal&Kingston, 339p.

Paul-André LINTEAU（2017）*Une Histoire de Montréal,* Boréal, 537p.

イザベラ・バード（2014）高畑美代子・長尾史郎訳『イザベラ・バード/カナダ・アメリカ紀行 *The Englishwoman in America*（底本）』，東京，中央公論事業出版，414p.

ディケンズ著（2005）伊藤弘之他訳『アメリカ紀行Dickens（1842）*American Notes*（底本）』（上）（下），東京，岩波文庫，（上）433p，（下）435p.

以上は、2024年1月刊行予定の明石書店『ケベックを知るための56章』の「観光」の章で執筆した原稿の要約である。

2) プリンス・エドワード島のコンテンツ・ツーリズムについて

プリンス・エドワード島のコンテンツとして、とりわけ日本人ツーリストのバイブルともいえる『赤毛のアン』を選んだ。今回の考察では、イギリス文化が色濃く反映されていること（アフタヌーンティー文化など）、アンのロマン主義的まなざしが読者を取り込み、アンのまなざしで、つまりツーリストはアン主導で島を観光しているのではないかと仮定するに至った。アンシリーズは全八巻の大作である（2009年に新たに出版されたものを含むと全九巻）。少女のアンは、第一巻の『赤毛のアン』つまりグリーンゲーブルズで暮らす時だけなのである。孤児院や親せきの家を転々と過ごしたアンが、初めてグリーンゲーブルズに来たことから始まる第一巻では、アンはツーリストとも言える。島を訪れる読者（コンテンツ・ツーリスト）は島の住民アンによって導かれる島の風景を楽しむだけでなく、むしろ、彼らと同様に外部から来た少女アンと一緒に島を観光している気分になるのではないだろうか。

［参考文献］

L.Mモンゴメリ（1908）『赤毛のアン』*Anne of Green Gables*（『赤毛のアン』1），松本侑子新訳（2019），文春文庫

――――（1909）『アンの青春』*Anne of Avonlea*（『赤毛のアン』2），（2019）

――――（1915）『アンの愛情』*Anne of the Island*（『赤毛のアン』3），（2019）

以上は、立教大学観光学部『RT』3号（2024年3月）に掲載予定の内容をもとに加筆修正したものである。

（3）ルルド研究の継続

2019年よりフランス・ルルドを中心とした宗教観光を行っている。コロナ禍であった2020年より、渡航できないという事情もあり、日本のコピー版ルルドについて研究テーマを広げている。フランス・ルルドは、1858年のマリア出現と湧水の奇蹟（聖水）によりたちまち有名になった都市であり、傷病者の団体巡礼ツアーが初めて開催された聖地である。ルルドが観光巡礼地になった経緯、観光巡礼地ルルドの現状等については、拙稿に書いた通りである[(1)]。研究を進める中で、日本、とりわけ長崎県に複製ルルドがたくさんあることを知り、その経緯を知るために現地調査、文献調査を行っている。長崎県では2018年「長崎と天草地方のキリシタン関連遺産」が世界遺産の資産として登録されている。そのひとつ大浦天主堂は「信徒発見の場」として観光資源としての価値が強化されている[(2)]。一方で、パリ宣教会のフランス人神父、潜伏キリシタン、そしてその子孫が苦難の末として献堂されて浦上天主堂は、原爆によって破壊されたことのみが悲劇とされ、世界遺産のキリシタン関連遺産としての価値から外される。周知のようにキリシタン迫害史で名高い「浦上四番崩れ」はまさしく、この地域で起こったものである。長崎市の一般社団法人　長崎国際観光コンベンション協会が主催する「長崎さるく」では浦上散歩のひとつとして「長崎のルルド巡礼」を提供している[(3)]。本河内教会のルルドと善長谷教会のルルドの二か所である。浦上には、小峰のルルド、聖フランシスコ病院内のルルドもあるが、観光の場として観光客（巡礼者）を受け入れるのは、本河内と善長谷のようである。一方で、執筆中の論文の中でも取り上げたが、2022年8月の調査ではJR長崎駅の中に設置された観光案内所でのインタビューでは、二つの教会（ルルドを含め）は信者さんが行くところではないかとの見解を得ている。2023年5月27日にコロナ禍をへて4年ぶりに開催された本河内教会のルルド祭りに参加する機会を得ることができた。論文では、この現地調査を中心に長崎ルルドとその参加者について考察を行う。

［補注］

(1)

①観光地ルルドにおけるホスピタリティに関する試論
白百合女子大学言語・文学研究センター　言語・文学研究論集（19）41-58.2019年3月

②巡礼地から観光巡礼地に至る変遷の一過程について：ルルドを事例として
白百合女子大学言語・文学研究センター　言語・文学研究論集（20）37-55. 2020年3月

③フランスの近代観光イベントに関する一考察：ルルド巡礼を事例として　日本観光研究学会全国大会論集（33）169-172. 2018年12月

④コンテンツ・ツーリズムとしてのルルド巡礼の一考察
日本観光研究学会全国大会論集（34）353-356. 2019年12月

⑤コピー版ルルドの一考察：長崎を事例として
日本観光研究学会全国大会論集（35）137-140. 2020年12月

⑥観光都市長崎から周縁化する「浦上」について
立教大学観光学部紀要（24）98-113. 2022年3月

(2) すでに宗教の場ではない。1,000円の入館料が必要。天主堂入り口の向かい側にあるマリア館大浦カトリック教会が信者の祈りの場所である。

(3) 2023年現在、「コルベ神父の足跡を巡る」のタイトルに変更されている。

（4）おわりに

研究領域は今後もフランスとカナダを中心に行う予定である。2019年から継続している科研費研究（ルルド研究）2023年が最終年である。来年度は、これまでの研究成果をまとめていきたい。